

公開ラウンドテーブル

「早稲田大学のダイバーシティ・男女共同参画を考える」を開催しました

2015年12月1日、大隈記念タワー地下1階多目的講義室において、Waseda Vision 150 事務局と共に、標題のラウンドテーブルを開催しました。



冒頭、男女共同参画担当の畑恵子理事より、本会の目的を、早稲田大学におけるダイバーシティに関する議論のスタートアップと位置づけ、①本学における尊重すべきダイバーシティとは何か？ その基本理念とは何か？ ②そのような理念、あるべき大学像をどのように学内で共有し、社会に発信するのか？ について、参加者と共に考えていきたいとの説明がありました。その上で、ダイバーシティについて研究・教育、啓発活動を進め、大学構成員が意識や行動規範を共有できるようにすること、そして学外へ向けて情報発信する際には誤解を招かないような大学像を示すことが重要であるとししました。

このあと、畑理事、男女共同参画推進室長の矢口徹也教育・総合科学学術院教授、村田晶子文学学術院教授、橋本周司副総長の順に発表し、その後、発表者全員が登壇、ファシリテーターの本田恵子教育・総合科学学術院教授の進行で、参加者からの質問への応答、ディスカッションを行いました。

畑理事からは、国内の男女共同参画やダイバーシティに関する政策などの説明と、海外の大学の取り組み、アメリカのスタンフォード大学やラトガー大学の大学マスコットをめぐるエスニシティやダイバーシティの議論の事例紹介がありました。

矢口室長からは、早稲田ベア（女性版）に関する男女共同参画推進委員会での議論の紹介がありました。また、ダイバーシティ・男女共同参画理解のために開設した講座、公開講演会、そこで議論された大学とダイバーシティに関する課題について報告がありました。その上で、今後、大学の Diversity&Inclusion という場合、多様な個性の発揮と「大学全体の教育目標」との関係性をどう説明していくか、求められている段階にあるとししました。具体的項目として、共有する価値、コミュニケーションと意思決定のプロセス、内部調整のしくみづくり、アイコン、メディア活用とガイドラインの必要性を指摘しました。



村田教授からは、女性版が一時提案されたことに対し、1910年代の、良妻賢母教育を批判する山川菊栄の一文が紹介され、女性への高等教育開放の歴史を拓き、林陽子国連女性差別撤廃委員会委員長ら多くの優れた先輩を輩出している早稲田大学において、女性の教育の捉え方において、100年も遡

るようなことがあってはならないとの指摘がなされました。また、知の創出の共同体への変革のために、ダイバーシティに取り組むことは重要であり、ジェンダーやセクシュアリティに関する研究の充実と学びのあり方そのものの構造転換に挑む必要性が語られました。

三人の発表後、橋本副総長からは、まず、本会は自身が強く希望し開催に至ったことの説明と、このような議論の場が設けられたことを感謝していると、関係者への謝辞がありました。また、畑理事の発表の中で紹介されたラトガー大学でのダイバーシティの議論について、そのような議論が海外にもあることを健全だと感じると共に、本学でも、学生から「LGBT 学生センター」設立の提案があったことは、とても嬉しく思っていると感想がありました。



質疑応答では、ファシリテーターの本田教授により、次のような参加者からの質問が読み上げられ、それぞれに応答しました。

「ジェンダーの問題に関して、キーワードになるのが、どうしても男性の協力かと思う。男性の先生方はどう考えるか、解決策となるのは何か」

「今の小中高校では、どのくらい LGBT 教育が普及し、「共に」学ぶ環境が広まっている（いない）のか？ 受け入れる大学にとって重要な観点だと思う」

「ダイバーシティ推進に関するさまざまな講座が早稲田で始まっていることがよくわかった。

「個性」を尊重する、としている早稲田がダイバーシティを推進していくためには、さらなる学生への啓発が必要だと思うが、そのような授業を受けようとする学生はもともと関心がある層だと思う。ダイバーシティ教育を必須化する必要性を感じるがどう思うか」

「女性教員の採用比率について、教員の意識改革が難航しているように思うが、現状はどうか。また、突破口となるようなドラスティックなことも場合によっては必要だと思うが、何か試案（私案）はあるか」



限られた時間の中ですべての質問や問題提起への応答はできませんでしたが、今後のダイバーシティ・男女共同参画の取り組みのヒントとなるような質問、意見も寄せられました。

最後に、大野理事より、参加者と発表者への謝辞が述べられ、ダイバーシティは、Waseda Vision 150 の 3 つの重要な課題の 1 つであり、取り組んでいきたい、と締めくくりました。